

今号の表紙 屋宜久美子『葬華』（2008, 直径88cm×2点）

作者のことば

タイトルにあるように、表紙の作品は私が死について深く考える出来事があった年に制作したものである。そのため、私の考える死生観が強く打ち出されている。二点でひとつの作品となっているが、片方は生を、もう片方は死を表している。しかし、どちらが生でどちらが死であるというような区別はなく、両者が互いを含みあいながら共に存在していることを意味している。

生と死とは不思議なもので、たとえある人がこの世に存在しなくなっても、私たちは自己の内にその人の生命を感じることができる。そのような意味においては、死も生の一形態といえる。私たちは長い時間軸の中で偶然に繋がることのできた生を、今生きている。

作品を通して生と死について語ることは、現在の自己の存在を問うことであり、鑑賞者自身の存在について問いを投げかけることでもある。

屋宜久美子（やぎくみこ）

1980年生まれ。2010年東京藝術大学大学院 芸術学専攻（美術教育）博士後期課程修了
2006年東京藝術大学・平山郁夫賞、2007年修了作品東京藝術大学美術館・買い上げ賞。
東京、沖縄を中心に個展、グループ展多数。

E-mail : kumikoyagi@gmail.com



編集後記

■16巻1号をお届けいたします。今回は昨年度の本学会研究奨励賞受賞者論文、欧州時間生物学会若手奨励賞受賞者論文に加えて、4件の総説を掲載いたしました。それぞれ読み応え充分な力作であり、執筆者の方々に感謝いたします。また、本間理事長には、日本の時間生物学の歴史をまとめて頂きました。周期性に関する研究をわが国で最初に行ったのは誰であったかご存知でしたでしょうか。今後世界の研究史についてもご執筆いただけるとのことで、楽しみにお待ちしております。

■海外だよりには、最近海外で研究室を立ち上げられた名越絵美さんに、そこに到るまでの海外での経験談をお書きいただきました。若い方々には海外でポジションを得るにはどうすれば良いのか、大いに参考にさせていただけると幸いです。

■表紙のデザインは、今回公募による多数の応募作品の中から、厳正な審査を経て採用されたものです。審査の意図やデザインの意味するところなど、審査委員の講評や作者の説明をご覧いただければと思います。また、その他の入賞作品についても本誌の審査結果のページと学会のホームページに掲載されておりますので、是非ご覧下さい。

■さて、新しい年度が始まり既に一月半が経過しようとしています。今年にはKonopka&Benzer(1971)によりショウジョウバエ時計突然変異*period*がPNASに発表されて39年目に当たります。この発見以来、1984年の*period* 遺伝子のクローニング、1997年の哺乳類時計遺伝子のクローニングと、13年ごとに時間生物学の大きな発見がなされてきており、今年はその大発見が予測される年に当たります。どのような発見があるのか、大いに期待したいと思います。

時間生物学 Vol. 16, No. 1 (2010)

平成22年5月31日発行

発行：日本時間生物学会 (<http://wwwsoc.nii.ac.jp/jsc/index.html>)

(事務局) 〒162-8480 東京都新宿区若松町2-2

早稲田大学先端生命医科学センター 柴田研究室内

Tel&Fax : 03-3341-9815

(編集局) 〒700-8530 岡山市北区津島中3丁目1-1

岡山大学大学院自然科学研究科 生物科学専攻内

Tel&Fax : 086-251-8498

(印刷所) 名古屋大学消費生活協同組合 印刷・情報サービス部